

山内一豊の妻 千代 戦国版「妻をめとらば」

やまうち かずとよ

山内一豊という人物とはどういう人?と問われてすぐに答えられる人は、歴史をよくご存じの方であろう。それくらい歴史的にはマイナーな人物である。ましてや、その妻となると、多くの歴史家でも答えられる人は稀であろう。

高知市に取材に行き、「土佐山内家宝物館」の学芸員の方に一豊の妻について質問を試みた。しかし、そうした専門家でもすらすらと答えは出てこなかった。

それはなぜか?資料がきわめて少ないからである。世間には「山内一豊の妻」に関する本は幾つかあるが、大半がフィクションである。土佐出身の偉人は、幕末に活躍した坂本竜馬、三菱グループを創設した岩崎弥太郎、以前100円紙幣に登場した自由民権運動の立役者、板垣退助等々、枚挙に暇がないほどであり、一豊、それにその妻が、かれらのかげに隠れてしまっていることは残念である。

従って、この課題に取り組むのはたいへんと思ったものの、一方、あまりにも少ない資料をもとに書くことに「挑戦」してみたいという衝動にも駆られた。



▲見性院像



▲山内一豊像

1 山内一豊の運命を変えた出来事

尾張、越前、近江は足利幕府の筆頭管領の斯波氏（足利氏の一門）の支配下にあった。

斯波氏は奥州も含め広大な土地を領有していたため、各地の領土に守護代を置き、徴税、治安、情報収集等、現場の諸々の仕事をやらせていた。

しかし、応仁の乱を境に社会構造変革と人々の意識改革が起こり、室町幕府の権力も地に落ち無政府状態に陥っていた。

尾張は、上四郡を織田伊勢守家が支配し岩倉を本拠地とし、下四郡は織田大和守家が同じように支配し清州を本拠地としていた。越前は同じ斯波氏の守護代であった朝倉氏が本拠地としていた。

織田信長の父信秀は、主家大和守家の家老で勝俣城を居城とし、山内家は伊勢守の家老として黒田城を居城としていた。当初は、力の均衡が取れていたが、信長が信秀の跡目を継いでから尾張の勢力図は一変した。

信長は、主家である清州城の織田大和守を急襲し滅亡させた。そして、居城を清州城に移し尾張下四郡を手中に収めた。

弘治3年（1555）信長は尾張統一のため手始めに上四郡を支配している黒田城を侍大将の坂之上権平勝元に襲撃させた。

黒田城内も寝静まった深夜。異様な物音に目を覚ましたのは一豊の兄十郎であった。そのとき、祖父江次郎兵衛がとんできた。

「敵襲でございます」

「どこの者たちだ」

「織田の旗が見えますれば、まず信長の配下の者と思われまする」

そのときである。門外で

「われは織田信長様の侍大将坂之上権平勝元と

申す。神妙に降伏して門を開けられよ。さすればお命はお助け申そう。逆らえば一族郎党皆殺しにいたす。返答なされい」

と迫った。当主山内盛豊と長男十郎は、少々時間を稼いで、妻法秀院（俗名不明）や一豊はじめ家族を逃がす算段をした。こちらは10名ばかり、相手の軍勢は100名以上である。突然の急襲に家臣は留守居の者しかいなかったのである。

「坂之上殿、わしは主^{あるじ}の盛豊である。勝ち目はないゆえ降伏いたす。しかし、城主らしく衣装などの身支度をさせていただきたい。いかがか」

門を挟んでのやりとりである。

「よろしかろう」

盛豊は妻法秀院に、

「子供たちを頼む。隠し穴を通して城外に出、わしの妹の嫁ぎ先である美濃の松倉城主前野長康を頼れ。守りに祖父江次郎兵衛と五藤^{ごとう}為^{ため}浄^{きよ}をつける。二人とも頼んだぞ」

「わしは門を開くと同時に十郎と騎馬で岩倉城に入るつもりだ。運があれば、また会うこともできよう。わしらが敵をひきつける」

一豊、10歳の時である。

盛豊と十郎は甲冑をつけ、残る家臣と供に門が開くとともに囲みを突破し岩倉方面に走り出した。

信長の侍大将坂之上は

「おのれ謀^{たばか}りおったな、追え。決して逃してはならぬ。追え。追え」

といきり立って下知した。

半里ほどのところで背後から鉄砲を撃ちかけられ、盛豊と十郎は背中を撃ち抜かれて、無念の戦死であった。しかし、法秀院たちは無事脱出に成功し、夜陰にまぎれて無事松倉城に到着できたのである。

永禄2年、信長は岩倉城の織田伊勢守信賢を襲撃、これを討伐して尾張を統一した。

しかし、山内家は主家を失い浪々の身分となってしまう、両親の縁者を頼っては転々寄寓していた。

しかし信長の力がすこしずつ強大になるに従って、
かくま 匿う縁者も信長に気兼ねして長期滞在を嫌がった。

その後、美濃の牧村城主牧村正倫まさ みちのもとに寄寓した。牧村氏は反信長派で齊藤竜興かみ りに与力していた。しかし、牧村氏はそのために輕海かろ（現在の本巣町輕海）の戦いで敗れてしまった。牧村家は「万葉集」を撰した大伴家持の末裔という名家であったが、この敗戦で没落した。そこで正倫は一豊を地元の有力者、山岡対馬守景佐かぜ すけに紹介した。山岡氏は200石で一豊を召し抱えた。山岡氏は信長の軍勢力には敵わずと判断。信長の与力として従属してしまった。一豊はこうして図らずも信長勢という立場になってしまったのである。

また、そのころ母の法秀院は一豊とは別に御所や公家との関係の深い、近江国宇賀野の長野家に寄寓していた。そこで、近所の子供たちを集めて習字、行儀作法、裁縫等を教えて安穩な生活をしていた。

2 一豊と千代との出会い

母の法秀院が寄寓していた長野家は、先祖ありに在原業平わらの なり ひらがいるとされる名家である。そこに毎日、近所の子が寺子屋のように通っていた。

そのとき、隣村の飯村から千代も習いにきていた。法秀院は、芯が強く、利発で人柄のよい千代を気に入っていた。千代は14歳。当時としては結婚適齢期である。一豊も26歳になる。結婚が遅いといっても過言ではない歳である。

千代の父親は浅井長政の家臣で、中級クラスの家柄であった。

その頃、一豊は山岡の家臣として木下藤吉郎の一夜城で有名な墨俣城築城に関わっていた。そのとき、前述の縁者の前野長康は蜂須賀小六に依頼して、一豊を藤吉郎に召し抱えてもらえる様に計らってもらった。禄高は50石であったが、承諾されて晴れて木下藤吉郎の家臣となった。信長の信任の厚い藤吉

郎はご奉公にたりる主君と判断して一豊は精勤に励んだ。

法秀院は若宮喜助友興の自宅を訪問して率直に結婚話を切り出した。

「若宮殿、千代殿をぜひ我が息子一豊の嫁にいただけませんか」

友興は突然の話にびっくり仰天した。少々沈黙が続いたので友興も冷静さを取り戻した。

「法秀院殿、何のお戯れをおっしゃる。千代はまだ14歳でございます。本人は結婚など考えてもおりません。わははは。ところで法秀院のご子息は、どういうお方ござるか」

「いまは、織田信長殿の家臣、木下藤吉郎殿という主人に仕官しております」

「う〜ん、知らぬ名前だが本当に織田信長殿のご家来でござるか。いま、墨俣において城の築造を任されている木下殿かのう」

「はい、墨俣城築城のため川並衆の蜂須賀小六殿のご援助のもと、美濃攻略のため築城しているその木下殿でございます」

「左様でござったか。その木下殿ならば信長殿の信任が厚く、ゆくゆくは織田家のご重臣になられるお方と聞いております。一豊殿は良き主君にお仕えあそばされましたのう。法秀院殿」

「山内家の縁者である江南の前野長康殿や蜂須賀小六殿のご推薦をいただき、つい先日木下様に仕官いたしましたようでございます」

「織田信長殿はあつという間に尾張を平定されたが、けれども山内家にとっては敵でござろう」

「まあそれはそうでございますが、この戦国のならいでは仕方ありません」

「それよりこれからはそのようなしがらみを捨て、強い主君にお仕えせねば家が滅亡してしまいます。私から申すのもおはずかしいのですが、一豊は無器用なれど真面目一本槍の男でございます。千代殿のお支え

があれば必ずや出世も叶うと思うております」

「母上様のお気持ちはよく分かり申した。ところで一豊殿はいつお戻りかのう」

「わたしもはっきりとはわかりかねますが、いま美濃の斉藤竜興殿と交戦中でございます。墨俣城が完成したらすぐ、この母のもとへ帰るよう文をしたためます。そして、一度お会いくださいませしてから、お返事をいただけますまいか」

「まあ、結ばれるのはわしらではないからの。ははははははは」

「まあ、お話がお上手なこと。ほほほほほ」

法秀院はさっそく一豊へ文を書いた。一週間ほどで一豊から返信が届いた。墨俣城は驚くほど速く完成したので、3日のうちに帰るとのことであった。

一豊は3日目に帰ってきた。ふたりは若宮家で初めて顔を合わせた。

一豊は千代があまりに美しかったので、緊張でがちがちな様子は誰にもわかった。千代は内心ウブなお方と思った。

そして、二人だけで散歩に出かけることになった。一豊は心の中で、何を話せばよいかと自問自答し、緊張のあまり、右手と右足、左手と左足が同時にでてしまっていた。うしろを歩いていた千代は吹き出しそうになったがじっとこらえていた。口火をきいたのは千代であった。

「一豊さま、墨俣城は予定よりはるかに速くできたのですね」

「は、はい」

「一豊さまもずいぶんご助成なされましたでしょ」

「は、はい」

「まあ、先ほどから“はい、はい”ばかり、どうなされたのですか。私がお気に召しませぬか」

「いえ、と、とんでもありません。こんなにお美しいお方に何か申さねばと思えば思うほど、先程より喉が渇いて声になりませぬ。誠に申し訳ござりませぬ」

「なにもお謝りになることではございませんわ」

「わしはこういうことは初めてでして」

もう、一豊は真っ赤な顔になっていた。

「わたくしも初めてですよ」

「わしは、母上からは利発でおやさしい方と伺ってありました」

「それで一豊さまは直にご覧になっていかがお思いですか」

「それはもう母上のおっしゃる通りでありました。いやそれ以上のお方とお見受け致しました」

「わたくしは一豊さまより12も年下なのですよ。もっとお威張になってよろしいのですよ」

「は、はい」

初めはこのような会話が続き半時ほどして、一豊も千代も互いにすっかり打ち解けて戻ってきた。

一豊は千代の両親の前で、手を震わせながら申し述べた。

「ご両親さま。千代様を嫁に貰い受けたく存じます。お願い申し上げます」

まず、吹き出したのは千代の母であった。

「一豊殿、そう堅くならずにおほほほほ」

父上は

「千代はどうじゃ。一豊殿に輿入れするか」

千代はあかるく

「わたくしは、一豊様の嫁になりとうございます。父上さま」

一豊は、この決断の速さにいっそう震えが止まらなくなった。こうして、千代は一豊の妻になったのである。元亀元年の春であった。

3 美濃攻め

一豊と千代には尾張の信長の家臣専用の住居が与えられた。運のよいことに隣はのちの金沢100万石の前田利家^{あるじ}家で、その隣が主の木下藤吉郎の屋敷であった。屋敷の広さは石高により違うが、藤吉郎の妻おねも利家の妻まつも、夫の身分など

関係なく気さくに行き来してくれた。侍大将に昇格した藤吉郎の妻おねなどは、野良仕事が好きで、広い自分の屋敷内に畑をつくり、まつ（利家の妻）も千代も一緒に野良仕事を手伝った。

「千代が大根を抜いた。まあ、千代のようなすらっとした良い大根だこと。でも、このようにわたしが抜いた太^ふっといほうが実はおいしいのよ。ねえ、まつ」

「さようでございます。太いほうがじっくり煮込むと味が長持ちしておいしいですよ」

戦さの前の、しばしの平穏な生活であった。

美濃の攻略が決まった。当然、一豊も藤吉郎の家臣として従軍せねばならない。

一豊はしばしでも、内心では千代と別れるのがいやであった。

「千代、わしはこの戦いで手柄を立てて少しでも恩賞を授かり、そなたを幸せにするからな」

千代は

「一豊様のお手柄などより無事のご帰還を願っております。千代はここで朝な夕な一豊様のご無事をお祈りいたしております」

千代はこの時、わたくしは生涯、一豊様をお護^{まも}りしようと誓うのであった。

あくる日、「皆の者、出発だ」

山内一豊には譜代の五藤と祖父江の家臣がいた。50石（現代の貨幣価値に直すと年収250万円ほど）で彼ら足輕も食わせていかなければならなかったから、千代の苦勞のほどが知れるというものである。一豊家の家計はまな板が買えず杓^{しやく}の底を代わりに使う程貧乏^{らいふく}で、磊落な一豊が友人を連れて自宅にて宴会をする時など、一豊に内緒で自分の髪を売って金を工面していたと言われている。

一豊は「この美濃攻めで功名を立てて、お前たちにもいいものを食わしてやるからな」

「でも殿、なんだかお疲れのようですが、いかがなさ

いました」

と五藤がにやと笑って言うと、

「わしは元気じゃ。それに、お前たちがしっかりしとるから大丈夫じゃ。ははははは」

「へいへい、必ず敵の首を獲ってくださいよ」

「そりゃ、わかっておる」

「しかし次回の戦までにその老馬をお変えになった方がよろしいかと思いますが」

祖父江も五藤もそろって言った。一豊は「くそ」と思い、馬を変える金子^{きんす}がないのだと言いたかったが言えなかった。

事実にはちがいがなかった。敵の馬に追いつかれ背後から斬られそうになったことが、何度もあったからである。そのたびに、二人が長槍^{まほ}で護ってくれた。

元亀元年、反信長派の朝倉義景を攻めるべく、敦賀^{てんづつやま}の天筒山城を攻撃した時も城は一日で落城したが、一豊主従は足輕の首級ひとつさえもあげられなかった。

千代という美しく、利発な女房に貧乏をさせている。一豊は自分が情けなくなった。

明日は朝倉景恒の守る金ヶ崎城攻めであった。しかし、その前夜、景恒は降伏して越前に撤退をはじめたのである。

これでは戦いにならないし、功名があげられない。どんな顔をして千代の前に戻ったらよいか、一豊は野営しながら気分が落ちこんでいた。

朝倉軍は撤退をはじめたが、朝倉勢の殿^{しんがり}（味方を逃がすため敵と戦い時間稼ぎをする重要な役目）を務めるのが、朝倉義景の右腕ともいわれ、朝倉軍では一番の弓の名手、「三段崎勘右衛門為之」で朝倉勢きっての猛将であった。

さすが朝倉の猛将三段崎は、秀吉軍の攻撃を食い止めていた。

「あれがかの猛将のなかの猛将、三段崎か」

一豊はまったく無意識のうちに三段崎に、

「我は藤吉郎秀吉の家臣、山内伊右衛門一豊なり。いざ、尋常に勝負。勝負」

と叫んで突進していった。

三段崎勘右衛門は、

「小癪^{こしゃく}な者め。この三段崎に尋常^{やっ}に勝負とは。馬鹿者めが」

勘右衛門は、ゆっくり弓をとり

「この勘右衛門の弓を受けてみる」

と言って矢を放った。三段崎勘右衛門の矢は、彼の狙い通り、まともに一豊の左の頬から右の奥歯まで貫通した。しかし、ここからが他の武将と一豊の違うところであった。ふつうはここで落馬して三段崎の二の矢を受けるところを、そのまま三段崎勘右衛門めがけて突進したのである。

こうして、一豊は三段崎勘右衛門と一緒に落馬した。その時、一豊は口に矢が刺さっていたのではっきりしゃべれなかったが、祖父江には「やつを槍で突け」、五藤には「はやく三段崎の首を獲れ」と一豊が言いたい事は「あ・うん」の呼吸でよくわかった。これを見た朝倉軍は大将の死を目のあたりにして兵達は思い思いに逃げ出したのである。

「みごと三段崎勘右衛門為之を討ち取りましたぞ。殿」

「よくやった」

そして一豊は五藤為浄に

「俺の顔に刺さっている矢を抜け」

と手でジェスチャーした。しかし、矢は左の頬を貫通し右の奥歯に刺さっていた。矢じりが口の中で飛び散っており、到底手で抜き取れる状況ではなかった。「五藤、わしの顔を踏みつけ、力いっぱい抜き取れ」しかし、五藤はためらった。

「そんな恐れおおいことは出来ませぬ。それにそのようなことをいたしては、お痛うございましょう」

「ばかもの。いまだって痛いわ。主の命令だ。申す通りやれ」

五藤は言われるまま、一豊の顔に土足^{こんしん}を乗せ、渾身の力で矢を引き抜いた

「ぎゃ〜。痛いではないか」と言いながら、一豊はにこやかに「よくやった」と褒^ほめた。

後日、一豊は総大将織田信長に呼び出され、この「大手柄」について、直々に褒美^{じき じき}の言葉をいただくことができた。

一豊は三段崎に、弓で口を射ぬかれた時、「ここぞ、突進し首をとりなされ」と、千代の声が聞こえた気がした。そして無心で突進していた。これで織田家中でも、山内一豊の名を知らぬ者はいなくなった。

4 浅井長政の裏切り

そこへ伝令が飛び込んできた。

「殿、浅井長政の裏切りでございます」

「長政が」

信長はすぐさま現在、自らの置かれている情勢を分析していた。

「すぐ、撤退じゃ。全軍に京に撤退と伝えよ」

その時である。

「上様。わたくし木下藤吉郎にしんがりをお命じくされ。命に替えましても上様が京にお着きになられますまで踏ん張ってお見せいたします」

「猿、よく言った。おまえの勇氣、感じ入ったぞ。では猿にしんがりを命ずる」

「ありがたきお言葉でございます。そうそうにお立ちくださいますよう」

「あいわかった。大変な役目なれどしっかり頼むぞ。猿、死ぬなよ。また京で会おうぞ」

と言い残し、少数の護衛のみで疾走していった。

一豊は手傷を負ったので、臥せっていた。そこへ藤吉郎(のちの秀吉)が現れ

「怪我はいかがかな。本当に命があってよかった、よかった。わしも一豊殿のおかげで鼻が高いわい」

「皆の者聞いてくれ。山内殿はこのような重傷を負われていながらも、このたびの重要なしんがりにもご参加いただける。武士はこうでなければならない。一豊殿はこの手柄で50石から400石を上様から賜った。大変な大手柄である。おぬしらも一豊殿の

ように、手柄を立てて尾張に帰ろうではないか」

一豊は傷の痛みで笑顔を維持するのが精一杯であった。藤吉郎の話す詳細がよく耳に入らなかった。

さっそく、軍装を整え出陣した。朝倉勢の背後からの追撃と浅井勢の待ち伏せで、今までにない大激戦になった。

信長本隊も浅井勢の攻勢に苦戦していたが、松永弾正久秀の合力を得てかろうじて京に入った。木下勢も朽木谷を過ぎるまでに沢山の味方の命を失った。

一豊は「千代や、わしを護ってくれ」と心で願いながら、必死で走り続けた。

木下勢は大打撃を受けたが、最終的な成功で、藤吉郎の名声はのぼり竜のごとく上っていった。

信長は、浅井、朝倉を討つために一旦、尾張に帰り軍の編成の立て直しにかかっていた。「旦那様。このたびのお手柄、まことに我が家名の誉れでございます。千代はとてもうれしうございます。ご苦労さまでした」

「これも千代に楽な生活をさせたいがためじゃ」といいながら、一豊は大変うれしかった。

「一豊様はかならず、一国一城の主になられますわ」

千代は、自分を一途に愛してくれる一豊と一緒にあった幸せを感じていた。このような生活が永遠に続くことを願った。

一豊は、近江の安土で馬市が開かれる情報を得た。馬といえば木曾馬か南部馬である。戦闘用の良馬というのはまず速く走り、気性が荒くて、ふつうの馬なら人が倒れていれば止まるところを、おかまいなく踏みつけ騎乗者の安定性を保つ馬である。重要なのは、敵の馬の横腹に突進して敵の武者を振るい落とし、敵が落馬したところを仕留めさせる機会を与える馬である。

この馬はまさにそういう馬だと一豊は長い経験から確信した。しかし、この馬の相場は高い。高くても5両までが相場なのに、この馬は10両という。このと

ころ、家臣も増えてなにかと物入りの時期に、我が家ではとても無理だと思った。しかし、家に戻ってもその馬のことが忘れられないでいた。それからは未練で毎日見に行った。千代は一豊に何とはない異変を感じた。「旦那様、内緒事はしない約束でしょ。最近なんか変ですよ。塞ぎこまれていますよ」

と持ちかけてみた。一豊は馬のことを千代に話した。「ほんとに乗り心地は良いし、何もかもいいんだ」

あくる朝、千代は一豊と一緒に安土へその馬を見に行くことになった。千代にも一目で良馬であることがわかった。彼女は、

「旦那様、買いましょう」

といったのけた。慌てたのは一豊である。

「そんな金どこにあるのだ。10両だよ。10両!!!普通の良馬の相場の2倍から3倍だ。無理だ」

「旦那様が諦め切れるのでしたら帰りましょ」

「わしは欲しくてたまらぬのだ。でも金が…」

「ここに、10両あります。これでお買いになれるでしょう。一国一城の主になる方はこのくらいの馬にお乗りにならなければなりません」

いつのまに貯めたのか。一豊はびっくりした。どうしてそんな金があるのか不思議でならなかった。

「千代、恩にきる。まな板も買えずに杵の底を使って料理している千代を見ていると、とても言い出せなかったのだ」

一豊は今買い求めた馬に千代を乗せ、尾張の自宅まで上機嫌で帰ってきた。

家臣たちも、こんな精悍な馬はこれまで見たことないと口々に言い馬に触っていた。

「先ほどのお金は、母、法秀院が『ここぞというときに使いなさい』と言って、結婚する時に内緒で渡してくださいましたもの。一国一城の主になるために使うのでしたら母も喜びましょう」

天正9年2月、信長は正親町^{おおぎまち}天皇をお迎えして、京^{ないないだいり}都内々裏において軍事パレードというべき『馬揃え』

を催した。信長はこの行事を自分の力の誇示と周辺大名への牽制、朝廷に対して威圧を兼ねて、あえて派手な催しにしたのである。この時、秀吉は播磨の平定で手が抜けなかったので信長の許しのもと、山内一豊に参加させた。このとき、信長は一番馬と一豊の乗馬を見て褒め称えた。

「わしの面目もたったわ」

と秀吉にも賞賛された。

信長は、のちに秀吉に

「猿め。よき家臣をもっておるな。あの一豊という者、今後が楽しみじゃ」

と褒め称えたと言われている。

浅井、朝倉を滅亡させた信長は、松平より徳川に改名した徳川家康からの要請もあり、日本一と言われた騎馬軍団をかかえる武田勝頼との決戦を決意した。「長篠の合戦」である。

この頃の秀吉は、木下藤吉郎を改め、羽柴筑前守秀吉と名乗っていた。また織田軍の確固たる重臣

の仲間入りをしていた。羽柴秀吉軍は織田信長の左翼を、また、勇猛果敢な滝川一益軍を右翼にした。この戦場は狭い丘陵地帯であった。武田の最強騎馬軍団に相対した信長は、馬防柵を連子川の湿地帯のうしろに3重、4重と造らせた。信玄ならばまずこのような戦いは回避するだろう。

その理由は

①鉄砲3000丁の威力が未知数であること。

②馬防柵の前に湿地帯があるため騎馬の威力が出せない。

③陣立が横に長いため騎馬隊の力が分散される。

しかしこの鉄砲を主体とした戦いを、愚かな自信家勝頼なら若さに任せて乗ってくるだろう。とあくまで信長らしい冷静な判断のもと、鉄砲3000丁を3列に分け、1列目、2列目、3列目と時間差攻撃による連射作戦を考えたのである。いままでの戦いにはない日本最初の鉄砲の連射作戦である。

武田勢の軍議では、山県昌景等歴戦の大將などすべてが猛反対した。しかし勝頼は意地になってこの正面突破作戦を無理やり強行したのである。

武田勢が先に動き出した。そして、武田の最強騎馬軍団が猛スピードで突進してきた。一豊は今までに経験したことのない騎馬軍団の勢いに恐ろしさで、軍装の中で失禁していた。

このとき、信長の作戦の真価が出た。騎馬軍団は沼地に馬の脚がとられ、馬防柵前で、動きがとれなくなったのである。その時、信長より大声で「撃て」という命令がくだった。そして三段構えの3000丁の鉄砲の一斉射撃が火をふいた。憐れ信玄公が10年以上費やして育てあげた大將が、馬防柵の数メートル前でばたばたと討死していった。あっけない日本最強の騎馬軍団の最期であった。

思わず一豊は、武田武者の無念さに心の中で拝礼した。愚かな指揮官に仕えるところになることを、まざまざと見た気がした。武田の第1次攻撃で、馬場信春、山県昌景、武田信豊、武田信廉、小幡信貞、



▲馬揃えで賞賛された一豊の愛馬のイメージ

原昌胤、土屋昌次が討死。甲斐の一国一城の主たちが率いる騎馬軍団の主力部隊は壊滅した。鉄砲がなかったら当方が一時もたず反対に壊滅していただろう。

信玄公を支えてきた大武将たちを鉛玉ひとつで殺せる。新兵器が今後の戦さを大変革する予感があった。武田勝頼は甲斐に逃げ帰ったが、天目山の戦いで一族は自害した。鎌倉時代より続いた名家がまた滅亡した。

武田家の滅亡、比叡山の焼き討ち、本願寺の降伏と信長は着々と『天下布武』をみごと推し進めていった。

そして羽柴筑前守秀吉には、最難関の毛利攻めの命令が下った。毛利氏も守護代から戦国大名に押し上がった戦い巧者である。

現在、NHK大河ドラマ「黒田官兵衛」をご覧になっている読者の方々は毛利と和睦するまでの駆け引きの有りよう、味方の士気の維持や調略の難しさ、人々のこころのうつろい、歴史は温故知新で、そこには今日に通じる教訓がたくさん秘められていることがお分かりであろう。

5 本能寺の変

信長自ら出馬するということは、毛利は確実に血祭りにされ、名も一族もこの世から消えることを意味していた。

美濃の斉藤、駿河の今川、甲斐の武田、越前の朝倉、近江の浅井等全て一族根絶やしにされている。彼の辞書には和議などという言葉はないのである。

又、四国の長宗我部元親、九州の島津義久に対する牽制をも意味していた。

しかし、秀吉にとって大変な悲劇が起きた。明智光秀による謀反である。

光秀は一時期、足利将軍の家臣であり、朝廷公家にも知り合いは多かった。だから、信長にとって利用価値があった。当初は光秀を通じて足利将軍に

近づき、足利将軍を通して公家との付き合いを広げていった。

光秀自身は武功で取り立てられ知識人として認められていると思い違いをしていたが、信長が足利義昭や朝廷、公家と交わるようになると、はっきり言えばもう用済みになっていた家臣であった。武力での戦功などなかったにもかかわらず、武においても認められているとの思い違いが、秀吉の指揮下に入ることに、光秀のプライドを大きく傷つけていたのである。だから、光秀はこの頃どうして信長が自分を冷たく扱うようになったか、を考えねばならなかった。武功ではやはり秀吉のほうが数段上であった。このとき、秀吉のもとで武功を挙げてゆけば生き残れたはずである。信長は人の活かしどころを見抜く洞察力はすごかった。ただ、部下に対する心くばりに欠けていた。実力主義は生き残るためには当然必要不可欠である。しかし、自分の意図通り動けない家臣を切り捨てるのではなく、次はこの男の活路はあるのかを思いやる心を相手にしっかり説明しなかったことがこの悲劇を呼んだのである。

6 秀吉の天下取り

秀吉に従って一豊は長篠の合戦後、中国地方の上月城攻め、有岡城攻め、三木城攻め、鳥取城攻め、淡路島の岩屋城攻め、備中高松城攻めと、秀吉の家臣として一所懸命に働いた。しかし、どの場合も取り立てて言うほどの戦功はなかった。しかし、秀吉は一豊の誠実、温厚な性格を気に入っていた。

秀吉が天下取りに一番乗りをしたのは、光秀との戦い『山崎の合戦』での勝利によってである。

後に開かれた清州会議では、柴田勝家の推す信長の次男である信雄と、秀吉の推す信長の長男信忠の子、三法師を推す意見との対立があり、会議の結果、秀吉の推す3歳の三法師が信長の跡継ぎに

決まり後見役には羽柴筑前守秀吉と決まった。これに強く反対したのが滝川一益と当然ながら柴田勝家であった。もはや、武力衝突は避けられなかった。そこで秀吉は天正10年、滝川一益の亀山城を攻めて勝利し、滝川を切腹させた。さらに天正11年、越前賤ヶ岳の合戦で柴田勝家に勝利、勝家は信長の妹お市（元浅井長政の妻）と居城越前北ノ庄で自害した。

この戦いは、「賤ヶ岳七本槍」の戦いぶりで後世まで、のちのち語り継がれるほどの大激戦であった。残念ながら一豊はこの七人のうちに入っていないが…。

その後、羽柴筑前守秀吉は小牧・長久手で徳川家康と対決、一豊は当然、秀吉勢の一員として参陣した。しかし、両者は決着がつかず和睦。秀吉はその後、破竹の勢いで四国の長宗我部元親を降伏させ、九州の島津討伐に入った。

秀吉はこの間、朝廷に近づき、古来より五摂家しか就任資格がない関白になろうとした。関白といえは朝廷のナンバー2である。そのために秀吉は近衛家の猶子となり、ついに関白と太政大臣の位に登りつめたのである。九州を支配していた島津氏は朝廷に逆らう逆賊の汚名を着せられ、九州各地で連戦連敗して降伏した。

秀吉は、次は関東北条氏政討伐にとりかかり、これを20万から25万の兵力で取り囲んだ。籠城戦には

武田信玄も上杉謙信も失敗している。東北の伊達氏も戦わずして秀吉の軍門に降^{くだ}った。一豊はこの間、5000石、その後、長浜20000石の大名となっている。

秀吉は朝廷から豊臣という姓を贈^{おく}られ、ここに関白太政大臣豊臣秀吉が誕生したのである。

このとき、関東に移封されていた家康の反逆の備えとして、東海道沿いに田中吉政、堀尾吉晴、山内一豊、一柳直末（大垣城）、中村一氏に領地が与えられた。

山内一豊は掛川5万石を与えられ堅固な城を築城した。掛川は今川氏の時代、朝比奈氏という今川家中ナンバー2が統治していたところで、東海道中でも栄えた城下町の一つであり、海にも近く軍事上も重要地点である。



▲掛川城



▲山内一豊転戦図



▲掛川城下町模型

7 関ヶ原の合戦以降

慶長3年(1598)豊臣秀吉が没した。秀吉は死期が近いことを悟ると、わずか6歳の秀頼の行末を案じて、五大老五奉行を任命し、秀頼の治世の補佐をさせようとした。

信長が本能寺に倒れてからというもの、秀吉の天下取りの手法は超人的な速さであった。しかし、秀吉の独裁政権であり、国内を統治する体制を作らなかったことは、彼の政権の致命的欠陥であった。

しかも淀殿が秀頼を生んでからは秀吉の思考に変化が現れ、朝鮮半島への進攻、豊臣秀次の切腹と、尋常さを欠いた行動が目立ち始めた。

このようなことをする前に、豊臣政権の安定維持のため内政の仕組みにもっと力点をおくべきであった。とくに、秀吉が黒田官兵衛を遠ざけたことは、致命的な失策であった。朝鮮戦争などをせず、豊臣恩顧の大名で政権の中枢を固めていれば、徳川家康も自分が天下を獲れるとは考えなかったであろう。家康からすれば、朝鮮への進攻あたりから秀吉政権の崩壊が見えていたにちがいない。前田利家が死に、加藤清正、小早川隆景が世を去った。秀吉は自分の死後の政権維持の事をもっと真剣に考え、家康対策を講じておくべきであった。徳川政権は秀吉が自らお膳立てしたのも同然である。家康は黙って時をみていれば、自然と政権が転がり込んでくると考えていたにちがいない。

千代は一豊より一歩下がって世の変化を見ていたので、すでに秀吉が存命の時から一豊に徳川家康に近づくよう助言していた。

上杉討伐が始まった。一豊は当然、家康に従って従軍している。千代は一豊が家康に豊臣恩顧の大名の最右翼と思われることを改めさせねばならなかった。家康の指示は最優先でおこなうよう助言した。一豊と千代の間には長浜の地震で失ったよね

姫しかおらず、男子がいなかった。そこで、実弟康豊の長男忠義を養子とし、家康に対面させ忠誠を誓わせるというデモンストレーションを行わせ、一豊には内緒で何かにつけて贈物も欠かさず行っていた。家康の信用を取り付けるには、次なる上杉討伐での活躍が期待された。

しかし異変が起きた。大坂で石田三成が挙兵したのである。

千代はとっさに石田三成からの合力依頼の書状を未開封の状態で他の武将よりはやく家康に手渡すこと、それに家康に合力すること、掛川城とそこに蓄えてある兵糧の進呈を誰よりもはやく告げることが家康の信任を得る最上の手段と考えたのである。いまだに豊臣恩顧の大名と見られている一豊にとってこれが欠かせない大事と考えたのである。

そしてその日のうちに家臣の田中孫作に命じ早馬で小山あたりに布陣していた一豊のもとへ、三成からの書状にその後の行動手順をしたためたもう一通の手紙を添えて、合計2通手渡しさせた。一豊は千代の指示通り行動した。家康は千代の思惑通り、未開封の三成からの一豊への合力依頼状を見て「一豊殿は読んでいないのか。それをわしが読んでよいのか」

と一豊に尋ねた。一豊は

「私、三成は好きになれませぬ。家康様にありのままをご覧頂いた方がよいと思ひまして持参いたしました」

家康は上機嫌で開封した。家康の顔色が見る見るうちに変わりはじめ家臣に

「すぐさま、上杉討伐に参陣している大名たちを集めよ」

と指示した。

家康は三成の一豊宛ての書状を全員にみせ、三成討伐の意向を示した。

その時、一豊は一番に立ち上がり

「居城掛川城と兵糧すべてを、家康殿に差しあげる

所存でござる。ご自由にお使いくだされますよう」
と全員の前で宣言した。

このあと福島正則は、

「わしに先鋒をお命じくだされ。憎き三成。この福島が必ず三成の息の根をとめてご覧にいます」
と宣言した。こうなれば、誰もがその場の雰囲気
に飲まれ、妻子が大坂屋敷で軟禁されるとわかってい
ながらも、反対できる者はいなかった。

一豊は家康に一層信任された。こういうことは、
最初に発言した者の言葉が、場の氣勢を決めること
を、家康はよくわかっていた。

すべては千代の思惑通りに進んだのである。

一豊は戦さでの功名としては姉川の戦いの時に
三段崎の首をとっただけであった。当時、功名も少
ない一介の浪人から24万5千石の大名になった者
は、一豊くらいであろう。秀吉は戦上手で功名也多
い、それによって出世した。しかし、一豊はどの戦さ
にも参陣はするものの、功名は樹てていない。ここが、
秀吉との大きな違いである。関ヶ原合戦でも、後方
で毛利に備えて陣を張っていたが、毛利が戦わずし
て撤退したので一兵も失っていない。

まことに、一豊は強運の持主と言わざるを得ない。
その当時すでに「情報」の重要性を認識していた
家康は、掛川5万石から土佐24万5千石へと5倍も
の領地を与えたのである。

8 土佐藩祖一豊と見性院

山内一豊は慶長6年(1601)に土佐に入国してい
る。家康は前領主長宗我部盛親が西軍に味方した
ため、お家断絶とし、土佐の領地全部を召し上げの
うえ追放して、その旧領をすべて山内一豊に与えた。

長宗我部も毛利の後方に陣を張っていたが、西
軍の負けがわかると、毛利と同じく戦わずして本国
に帰還していた。よって長宗我部軍の兵力は温存さ
れていたのである。しかし主家の取りつぶしが決

まって、一豊が入国してきても、長宗我部の旧臣は
素直に従わなかった。そこで従順に山内に恭順した
ものは、士分の身分を取り上げられ郷士(日頃は百
姓で無給。戦では駆り出された)として蔑^{さげす}まれた。
これが土佐藩にしかない上士(一豊の掛川城主時
代からの家臣)、下士(主に長宗我部の家臣)の身
分制度が生まれたきっかけである。下士は絶対上士
にはなれず、かなりの身分差別があったとされている。

新しい支配者に恭順しない者たちは一揆をおこ
して抵抗したが、すべて皆殺しにされた。

一豊は、当初、長宗我部の浦戸城にいたが、少し
北の高知に本丸の築城をはじめた。

高知城は慶長8年(1603)に完成し千代とともに
入城した。天守閣から見る景色の美しさは今も見る



▲高知城



▲高知城再現模型

者に感動を与える。

一方、長宗我部盛親は、大坂の夏の陣で旧臣とともに討死している。

慶長10年(1605)一豊は千代に看取られて没した。

夫の死によって髪をおろした千代は見性院という法名を名乗った。

振り返ってみて、一豊の妻というよりはひとりの戦友であったように感じた。それは一豊を護るために必死に支えた生涯であった。

見性院は翌年、京都の妙心寺の大通院で一豊の菩提を弔いつつ、藩は甥の忠義に継がせ、自分は寺で平穏に暮らした。

見性院はよく同じ京都の高台院(秀吉の妻おね)を訪ねて、お茶を飲みながら昔話をした。
「高台院さま、昔ご一緒に大根、なす、かぼちゃなど、秀吉様のお庭の畑で作っていたところが、一番たのしかったですわ」

「そうそう、あのときは芳春院殿(前田利家の妻)も皆、隣同士で、いちばん太い大根を抜く時は三人一緒に汗を流して引き抜き、あなたは力余ってうしろに転んでかぼちゃで腰を打たれことを覚えていらっしゃいますか」

「はい、覚えてますとも。そのときお尻に青いあざができました。あのころが私も一番楽しかったですわ」
芳春院も

「実は、私もあざをつくりましたのよ。ほほほ」

ひとつの時代がおわったことを、感じさせるひとときであった。

京都にて、秀吉の妻おね(高台院)や、加賀百万石の礎を樹てた前田利家の妻まつ(芳春院)たちと余生を安穩に過ごせたのは、わが命のことをかえりみず、ひたすら夫に尽くすことで懸命に生きた千代に与えられた報償としての安らぎと言ってもよいかわる。

山内一豊と妻千代の時代

天文14年(1545)	室町幕府の管領で守護でもある斯波氏の守護代(尾張上四郡支配岩倉城主)織田伊勢守の家老、山内盛豊の三男として一豊尾張黒田に誕生。(出生には異説あり)
弘治 3年(1557)	同じく斯波氏の守護代(尾張下四郡支配清州城主)織田大和守の家老、織田信秀から家名を継承した信長は、主家を襲撃して尾張下四郡を乗っ取る。いわゆる下剋上である。つぎの標的として一豊の父、山内盛豊の居城黒田城を急襲し、父盛豊と兄十郎は戦死。母法秀尼は一豊など子供を連れて縁者美濃松倉城主前野長康を頼った。ここに盛豊の妹が嫁していたからである。 その後、岩倉城の織田伊勢守も信長に滅ぼされる。織田伊勢守家断絶。 信長の尾張統一。 主家を失った一豊一家の流浪生活がはじまる。 近江浅井長政の家臣若宮友興の娘として千代が近江、飯村(現滋賀県近江町)に誕生。(出生地はどこで、親は誰なのかに異説あり。)
永禄 3年(1560)	桶狭間の戦。今川氏滅亡。 一豊元服。
永禄 4年(1561)	秀吉、おね(北政所)と結婚。
永禄 9年(1566)	家康、徳川に改姓。
永禄10年(1567)	このころ、一豊は流浪生活を終えて秀吉に仕える。
元亀 元年(1570)	信長が越前朝倉義景の支城、金ヶ崎城を攻略。 このとき一豊は朝倉氏の家中一の猛将で侍大将の三段崎勘右衛門に矢を射かけられ、口に矢が刺さったものの、それをものともせず取っ組み合いの激闘の末に首を取る功名をあげた。 これを見た朝倉勢は戦意が失せて越前に退却。 一豊は信長より直々の褒めにあずかり、信長は秀吉に一豊への恩賞として50石から近江唐国200石に加増するよう指示した。 しかし浅井長政の裏切りにあい、織田軍は背後を突かれて撤退。秀吉は進んでしんがりの役目を志願し信長の信任を得る。 信長、岐阜に戻り軍を立直し、朝倉・浅井連合軍を姉川で撃破。

元龜 2年(1571)	このころ、一豊と千代結婚。 信長、浅井長政の小谷城を攻め、自刃に追い込んで浅井氏滅亡。
天正 元年(1573)	朝倉氏の一乗谷を攻め、朝倉氏滅亡。
天正 5年(1577)	秀吉、信長より毛利攻略を命ぜられ、播磨に出陣。 一豊は秀吉より近江唐国 ^{からこく} 含めて400石を与えられた。 秀吉が毛利討伐のため播磨に出陣。 上月城攻略。一豊参陣 三木城攻略。一豊参陣
天正 6年(1578)	一豊と千代の間に与弥姫誕生。
天正 8年(1580)	信長は正親町 ^{おおぎまち} 天皇の面前で「馬揃え」をし(今でいえば国賓が来日したときの観閲式のようなもの)信長の武威を天下に見せつけた。このとき、信長は一豊の騎乗している馬をみてかなりの名馬と見抜く。この「馬揃え」に際して千代はこの名馬を手に入れるよう一豊に十両を渡して軍装も整えさせた。正親町 ^{おおぎまち} 天皇も「あの凛々 ^{りり} しい武者は誰か」とお尋ねになり、信長も天皇より「すばらしい家臣をお持ちじゃのお」と褒められた。これらはすべて千代の慮 ^{おもひ} りによるもので一豊の面目を上げ、信長に一目置かれる存在となるのに役立った。
天正10年(1582)	本能寺の変。秀吉は信長の死が毛利に知られる前に和睦。 秀吉、中国路大返しを敢行、山崎にて光秀と合戦して大勝利をおさめる。光秀は逃げる途中で、野盗狩りにあい殺害される。
天正11年(1583)	賤ヶ岳の戦い。柴田勝家は信長の妹お市殿とともに自害。 柴田家断絶。
天正12年(1584)	秀吉、徳川家康と小牧・長久手の戦い。一豊は秀吉方で参陣。 秀吉より近江長浜5,000石に加増され長浜城主となる。 家康は秀吉より、関東250万石を与えられ浜松から転封を命じられる。
天正13年(1585)	一豊は近江長浜2万石に加増され、秀吉の甥 ^{ひでつぐ} 秀次の宿老となる。
天正18年(1590)	秀吉、家康牽制のため一豊に掛川5万石を与える。東海道沿いに一豊と同じ役目で中村、堀尾、一柳等の豊臣恩顧の大名に加増の上新領地を与えた。

文禄 2年(1593)	朝鮮出兵の間、秀吉は九州の名護屋に詰めるため、秀次が内政をみる事となる。秀次の内政の補佐役として、宿老たちは渡海を許された。
文禄 4年(1595)	淀君に秀頼誕生。
慶長 3年(1598)	秀次、秀吉の逆鱗に触れ切腹。
慶長 5年(1600)	豊臣秀吉没す。 家康、上杉征伐のため大坂を出発。一豊も従軍。 山内家に石田三成からの挙兵の知らせと三成への合力依頼の書状が届く。千代は家康の信用を得るため、書状を未開封のままで家康に手渡すよう一豊に指示。千代の思惑通り一豊は家康の絶大な信用を得る。 あくる朝、家康は参陣している全大名を集め、小山評定を開く。 一豊は、掛川城の城、兵糧等すべてを家康に捧げることが言上。さらに家康の信用を高める。 岐阜城攻撃に参陣。 一豊は南宮山に布陣する毛利秀元、吉川広家、安国寺恵瓊に対する備えとして南宮山の東山道沿いに布陣、しかし毛利勢戦わずして撤退したため功名立てられず。 長宗我部盛親は西軍についたため、領地没収となる。
慶長 6年(1601)	長宗我部の旧領、土佐24万5千石を家康より拝領する。 長宗我部の浦戸城より少し北に高知城を建設しはじめる。
慶長 7年(1602)	浦戸一揆、滝山一揆が起こるが武力鎮圧。
慶長10年(1605)	山内一豊 没。土佐藩は甥の忠義が2代藩主となる。千代は「見性院」の法号を受け、京都の妙心寺大通院に居を移す。
元和 2年(1616)	徳川家康 没す。
元和 3年(1617)	千代は、12年居住した京都の妙心寺大通院にて61歳で没す。

※文中の写真は筆者撮影

〈参考図書〉

「山内一豊の妻」 楠戸義昭著 新人物往来社

「山内一豊と千代」 田端泰子著 岩波新書

「山内一豊」 歴史群像シリーズ 学研

(2014.8.18) 共立総合研究所 特命研究員 三矢 昭夫